

明治日本絵画の基礎教育「運筆」について

—幸野楳嶺筆《京都府画学校北宗運筆臨模絵手本》を中心として—

林 静佳（京都市立芸術大学）

明治13年(1880)に開校した京都府画学校は、文人画家の田能村直入(1814-1907)、円山四条派の幸野楳嶺(1844-95)等の尽力によって創設された。開校から明治21年までは東宗(土佐派・円山派)、西宗(西洋画)、南宗(文人画)、北宗(雪舟派、狩野派)の四宗に分けられ、諸宗派において教則、課業表が組まれた。西宗を除く三宗では、日本絵画の基礎教育である「運筆」の授業が設けられていた。それに用いる絵手本は、教員が自写することが画学校の教則で定められていた。そのため、当時、京都画壇で活躍していた画家である教員自筆の《運筆絵手本》が京都市立芸術大学芸術資料館に現存しており、その総数は1700点以上に及んでいる。《運筆絵手本》のカリキュラムやその変遷については先行研究において考察があるが、教材としての具体的な使用方法や学習の段階までは十分に明らかにされていない。そして、かつては不可欠であった「運筆」ではあるが、現代の美術教育や日本絵画に積極的に継承されているとは言い難く、実態がますます捉えづらくなっている。

発表者は、上述の芸術資料館所蔵《運筆絵手本》について悉皆調査を行い、情報の整理、臨写による実証研究を進めている。本発表では、開校当時の北宗の教員を務めた幸野楳嶺(在職1880-81、1888-90)筆と考えられる《京都府画学校北宗運筆臨模絵手本》折帖6冊85点に焦点を当てる。これに加え、楳嶺の私塾で使用されていた「略画」計123点(『楳嶺遺墨』所収)、「習学手本画」計90点(『幸野楳嶺』所収)や弟子の多田香疇(生没年不詳)の縮図帖(個人蔵)などから、楳嶺による初学者への指導状況を明らかにする。《京都府画学校北宗運筆臨模絵手本》折帖6冊のうち《略画運筆模本》《減筆花卉運筆模本》《花卉臨模模本》は、画学校の北宗における「運筆」「臨模」の5、6級の手本に相当し、5級の《減筆花卉運筆模本》、《花卉臨模模本》も他の資料からほぼ復元可能である。その結果、幸野楳嶺が考えた《運筆臨模絵手本》における学びの段階がより詳細に把握できる。

《運筆絵手本》の教育の方法は、楳嶺の「門弟教育法」で、「入門ある毎に…それぞれ面前に描いて与へ、筆の運用と順序とを会得させた。」(『楳嶺遺墨』)とある。時を経て、京都市立美術工芸学校絵画科2年時の野村耕(1927-91)資料(芸術資料館所蔵)などからも、教員が生徒の前で描いていた痕跡が確認できる。よって、楳嶺絵手本の筆痕を読み取り、実際の筆の動き、描き方を検証し、教育システムを解明する。楳嶺の「画学綱領」に示された絵画理念「十格」の「用筆自在」(『楳嶺遺墨』)に向けての体系的な教本へと繋がり、《運筆絵手本》は、画学校から美術工芸学校の教育にも受け継がれて展開していく。